

気仙沼の高校生二人が歩く『再生の道』270km サンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼路



↓巡礼者の証、ホタテガイの飾り ↓唐桑のホタテで作って日本から持って行く!



→ヒョウタンの水筒も巡礼者グッズのひとつ



we support!
RQ
災害教育
センター

MONTHLY

「東北に黒龍を送ろうー! 大作戦しんぶん」改め
復興支援
「すけさきた」
しんぶん

(7月6日 河北新報より抜粋) 宮城県気仙沼市の高校生2人がスペイン聖地巡礼の旅に出发することになり、同市唐桑町で5日、巡礼の証となるホタテガイの飾り作りを励んだ。巡礼の旅は、東日本大震災の被災地の若者支援に取り組むNPO法人「日本カミーノ・デ・サンティアゴ友の会」(東京)が企画した。

2人は気仙沼高3年の小山広和さん(17)と気仙沼西高1年の佐藤杏日花(あすか)さん(15)。26日に出发し、キリスト教三大聖地の一つ、スペイン西北部サンティアゴ・デ・コンポステラの巡礼路約270キロを13日間かけて歩き、現地の人々と交流する。

巡礼路はリアス海岸地形で気仙沼市と共通点が多い。震災後、日本人の巡礼を支援するNPO法人が高校生に新たな一歩を踏み出すきっかけをつかんでほしいと「○○(まるまる)の一歩」事業と銘打ち、過去2年間で計5人を送り出した。

2人は気仙沼市唐桑町の鮎立漁港で養殖ホタテを収穫。貝に穴を開けた飾りを手作りした後、デモンストレーションとして重さ10キロのリュックを背負い海岸沿いの道を約15キロ歩いた。

小山さんは「海外でたくさん刺激をもらい、自立への一歩につなげたい」と抱負を語った。佐藤さんは「いろいろな人々と仲良くなる一歩にしたい。美術部なので、美しい街並みも楽しみ」と笑顔を見せた。



日本カミーノ・デ・サンティアゴ友の会 (主催団体)からのメッセージ

サンティアゴ巡礼路はローマ、エルサレムと並ぶキリスト教の三大聖地のひとつ、スペイン・ガリシア州にある**サンティアゴ・デ・コンポステラ**(注:使徒聖ヤコブを埋葬した地に建てた教会の名)への参詣道です。

この道は古来「再生・復興の道」として広く知られ、宗教や人種に関係なく、世界中から多くの人がこの道を歩き、新たな人生への一歩を踏み出しています。世界各地からこの道を歩きに来ている人達は、聖地に到達するという共通の目的で互いに励まし合い、助け合いながら歩いています。これらの人達との出会いと交流を通して、彼らが自分なりの新たな一歩を踏み出すきっかけができると信じております。

なお、サンティアゴ到着後、気仙沼等、三陸海岸と同じくリアス式海岸で牡蠣、ほたての養殖等が盛んな**ア・コルーニャ**県の漁場の見学を予定しています。リアス式海岸はスペイン語由来の言葉で、ガリシア州の海岸も同じ地形を有しています。

<個性的な支援が誰かを救う>

とりあえず明日に命をつなぐ『緊急支援』に比べ、一人一人の人生をそれぞれの方法で支える『生活再建支援』は、誰にどんなものが必要なのか想像もつかないほどのです。『巡礼に派遣する』という、カトリックのNPOならではの発想は、「自分がひとに与えられるものは、決して一般的ではないけれど、もしかしら誰か一人二人の助けにはなるのではないかと、今までより柔軟に考えるきっかけになるような気がします。(彼らの巡礼の様子はNPOのHPで随時報告されます。http://asuira.main.jp)

『聖地巡礼ってどんなこと?』



キリスト教における巡礼は聖地への礼拝だけでなく、巡礼旅の過程も重要視されている。すなわち聖地への旅の過程において、人々は神との繋がりを再認識し信仰を強化するのである。道沿いには宿泊所が整備され、巡礼手帳を持つ者は誰でも無料で泊まる事ができる。食事も用意される。これらは巡礼を支える人々の無償の奉仕で成り立っている。徒歩による長い巡礼を続けることは、人々にとって信仰と向き合う貴重な時間となる。(wikipediaより)



クレデンシャル(巡礼手帳)各国版あり

「すけさきた」とは宮城県登米市あたりの言葉で「ホランティアに来たよ」という意味である

AUGUST
11
2014

